

銀河鉄道の夜

宮沢賢治

青空文庫

一、午後の授業

「ではみなさんは、さういふふうに川だと云はれたり、乳の流れたあとだと云はれたりしてゐたこのぼんやりと白いものがほんたうは何かご承知ですか。」先生は、黒板に吊した大きな黒い星座の図の、上から下へ白くけぶつた銀河帯のやうなところを指しながら、みんなに問をかけました。

カムパネルラが手をあげました。それから四五人手をあげました。ジョバンニも手をあげやうとして、急いでそのまゝやめました。たしかにあれがみんな星だと、いつか雑誌で読んだのですが、このごろはジョバンニはまるで毎日教室でもねむく、本を読むひまも読む本もないので、なんだかどんなこともよくわからないといふ気持ちができるのでした。ところが先生は早くもそれを見附けたのでした。

「ジョバンニさん。あなたはわかつてゐるのでせう。」

ジョバンニは勢よく立ちあがりましたが、立って見るともうはつきりとそれを答へることができないのでした。ザネリが前の席からふりかへって、ジョバンニを見てくすつとわら

ひました。ジヨバンニはもうどぎまぎしてまっ赤になってしまひました。先生がまた云ひました。

「大きな望遠鏡で銀河をよつく調べると銀河は大体何でせう。」

「やっぱり星だとジヨバンニは思ひましたがこんどもすぐに答へることができませんでした。」

先生はしばらく困ったやうすでしたが、眼をカムパネルラの方へ向けて、「ではカムパネルラさん。」と名指しました。するとあんなに元気に手をあげたカムパネルラが、やはりもちもち立ち上ったまゝやはり答へができませんでした。

先生は意外なやうにしばらくちつとカムパネルラを見てゐましたが、急いで「ではよし。」と云ひながら、自分で星図を指しました。

「このぼんやりと白い銀河を大きないゝ望遠鏡で見ますと、もうたくさんの小さな星に見えるのです。ジヨバンニさんさうでせう。」

ジヨバンニはまっ赤になつてうなづきました。けれどもいつかジヨバンニの眼のなかには涙がいつぱいになりました。さうだ僕は知つてゐたのだ、勿論カムパネルラも知つてゐる、それはいつかカムパネルラのお父さんの博士のうちでカムパネルラといっしょに読んだ雑

誌のなかにあつたのだ。それどこでなくカムパネルラは、その雑誌を読むと、すぐお父さんの書「齋」から大きな本をもつてきて、ぎんがといふところをひろげ、まっ黒な頁いっぱい白い点々のある美しい写真を二人でいつまでも見たのでした。それをカムパネルラが忘れる筈もなかったのに、すぐに返事をしなかったのは、このごろぼくが、朝にも午后にも仕事がつらく、学校に出てももうみんなともはきはき遊ばず、カムパネルラともあまり物を云はないやうになつたので、カムパネルラがそれを知つて気の毒がつてわざと返事をしなかつたのだ、さう考へるとたまらないほど、じぶんもカムパネルラもあはれなやうな気がするのです。

先生はまた云ひました。

「ですからもしもこの天の川がほんたうに川だと考へるなら、その一つ一つの小さな星はみんなその川のその砂や砂利の粒にもあたるわけです。またこれを大きな乳の流れと考へるならもつと天の川とよく似てゐます。つまりその星はみな、乳のなかにまるで細かにうかんでゐる脂油の球にもあたるのです。そんなら何がその川の水にあたるかと云ひますと、それは真空といふ光がある速さで伝へるもので、太陽や地球もやっぱりそのなかに浮んでゐるのです。つまりは私どもも天の川の水のなかに棲んでゐるわけです。そしてその

天の川の水のなかから四方を見ると、ちやうど水が深いほど青く見えるやうに、天の川の底の深く遠いところほど星がたくさん集つて見えしたが、つて白くぼんやり見えるのです。

この模型をごらんなさい。」

先生は中にたくさん光る砂のつぶの入った大きな両面の凸レンズを指しました。

「天の川の形はちやうどこんななのです。このいちいちの光るつぶがみんな私どもの太陽と同じやうにじぶんで光つてゐる星だと考へます。私どもの太陽がこのほゞ中ごろにあつて地球がそのすぐ近くにあるとします。みなさんは夜にこのまん中に立つてこのレンズの中を見まはすとしてごらんなさい。こつちの方はレンズが薄いのでわづかの光る粒即ち星しか見えないのでせう。こつちやこつちの方はガラスが厚いので、光る粒即ち星がたくさん見えその遠いのはぼうつと白く見えるといふこれがつまり今日の銀河の説なのです。そんならこのレンズの大きさがどれ位あるかまた□その中のさまざまの星についてはもう時間ですからこの次の理科の時間にお話します。では今日はその銀河のお祭なのですからみなさんは外へでてよくそらをごらんなさい。ではこゝまでです。本やノートをおしまひなさい。」

そして教室中はしばらく机の蓋をあけたりしめたり本を重ねたりする音がいっぱいでした

がまもなくみんなはきちんと立って礼をすると教室を出ました。

〔二一〕 活版所

ジヨバンニが学校の門を出るとき、同じ組の七八人は家へ帰らずカムパネルラをまん中にして校庭の隅の桜の木のところを集まってゐました。それはこんやの星祭に青いあかりをこしらえて川へ流す烏瓜を取りに行く相談らしかったのです。

けれどもジヨバンニは手を大きく振つてどしどし学校の門を出て来ました。すると町〔の〕家々ではこんやの銀河の祭りにいちゐの葉の玉をつるしたりひのきの枝にあかりをつけたりいろいろ仕度をしてゐるのでした。

家へは帰らずジヨバンニが町を三つ曲つてある大きな活版処にはいつてすぐ入口の計算台〔に居ただぶだぶの白いシャツを着た人に〕おじぎをしてジヨバンニは靴をぬいで上りますと、突き当りの大きな扉をあけました。中にはまだ昼なのに電燈がついてたくさんの〔輪〕転器がばたりばたりとまはり、きれで頭をしぼったりラムブシェードをかけたたりした人たちが、何か歌ふやうに読んだり数へたりしながらたくさん働いて居りました。

ジヨバンニはすぐ入口から三番目の高い卓子に座った人の所へ行っておじぎをしました。その人はしばらく棚をさがしてから、

「これだけ拾って行けるかね。」と云ひながら、一枚の紙切れを渡しました。ジヨバンニはその人の卓子の足もとから一つの小さな平たい函をとりだして向ふの電燈のたくさんついた、たてかけてある壁の隅の所へしゃがみ込むと小さなピンセットでまるで粟粒ぐらゐの活字を次から次と拾ひはじめました。青い胸あてをした人がジヨバンニのうしろを通りながら、

「よう、虫めがね君、お早う。」と云ひますと、近くの四五人の人たちが声もたてずこつちも向かずに冷くわらひました。

ジヨバンニは何べんも眼を拭ひながら活字をだんだんひろひました。

六時がうってしばらくたつたころ、ジヨバンニは拾った活字をいっぱいに入れた平たい箱をもういちど手にもった紙きれと引き合せてから、さっきの卓子の人へ持って来ました。その人は黙ってそれを受け取って微かにうなづきました。

ジヨバンニはおじぎをすると扉をあけてさっきの計算台のところに来ました。するとさっきの白服を着た人がやっぱりだまって小さな銀貨を一つジヨバンニに渡しました。ジヨバ

ンニは俄かに顔いろがよくなつて威勢よくおじぎをすると台の下に置いた靴をもつておもてへ飛びだしました。それから元氣よく口笛を吹きながらパン屋へ寄つてパンの塊を一つと角砂糖を一袋買ひますと一目散に走りだしました。

三、家、

ジヨバンニが勢よく歸つて来たのは、ある裏町の小さな家でした。その三つならんだ入口の一番左側には空箱に紫いろのケールやアスパラガスが植えてあつて小さな二つの窓には日覆ひが下りたまゝになつてゐました。

「お母さん。いま歸つたよ。工合悪くなかつたの。」ジヨバンニは靴をぬぎながら云ひました。

「あゝ、ジヨバンニ、お仕事がひどかつたらう。今日は涼しくてね。わたしはずうつと工合がいゝよ。」

ジヨバンニは玄関を上つて行きますとジヨバンニのお母さんがすぐ入口の室に白い巾を被つて寝んでゐたのでした。ジヨバンニは窓をあけました。

「お母さん。今日は角砂糖を買ってきたよ。牛乳に入れてあげやうと思つて。」

「あゝ、お前さきにおあがり。あたしはまだほしくないんだから。」

「お母さん。姉さんはいつ帰つたの。」

「あゝ三時ころ帰つたよ。みんなそこらをしてくれてね。」

「お母さんの牛乳は来てゐないんだらうか。」

「来なかつたらうかねえ。」

「ぼく行つてとつて来やう。」

「あゝあたしはゆつくりでいゝんだからお前さきにおあがり、姉さんがね、トマトで何かこしらえてそこへ置いて行つたよ。」

「ではぼくたべやう。」

ジヨバンニは窓のところからトマトの皿をとつてパンといっしょにしばらくむしやむしやたべました。

「ねえお母さん。ぼくお父さんはきつと間もなく帰つてくると思ふよ。」

「あゝあたしもさう思ふ。けれどもおまへはどうしてさう思ふの。」

「だって今朝の新聞に今年は北の方の漁は大へんよかつたと書いてあつたよ。」

「あゝだけどねえ、お父さんは漁へ出てゐないかもしれない。」

「きつと出てゐるよ。お父さんが監獄へ入るやうなそんな悪いことをした筈がないんだ。」

この前お父さんが持つてきて学校へ寄贈した巨きな蟹の甲らだのとなかひの角だの今だつてみんな標本室にあるんだ。六年生なんか授業のとき先生がかはるがはる教室へ持つて行くよ。一昨年修学旅行で「以下数文字分空白」

「お父さんはこの次はおまへにラッコの上着をもつてくるといつたねえ。」

「みんながぼくにあふとそれを云ふよ。ひやかすやうに云ふんだ。」

「おまへに悪口を云ふの。」

「うん、けれどもカムパネルラなんか決して云はない。カムパネルラはみんながそんなことを云ふときは気の毒さうにしてゐるよ。」

「あの人はうちのお父さんとはちやうどおまへたちのやうに小さいときからのお友達だったさうだよ。」

「あゝだからお父さんはぼくをつれてカムパネルラのうちへもつれて行つたよ。あのころはよかつたなあ。ぼくは学校から帰る途中たびたびカムパネルラのうちに寄つた。カムパネルラのうちにはアルコールランプで走る汽車があつたんだ。レールを七つ組み合わせると

円くなつてそれに電柱や信号標もついてゐて信号標のあかりは汽車が通るときだけ青くなるやうになつてゐたんだ。いつかアルコールがなくなつたとき石油をつかつたら、缶がすつかり煤けたよ。」

「さうかねえ。」

「いまも毎朝新聞をまはしに行くよ。けれどもいつでも家中まだしいんとしてゐるからな。」

「早いからねえ。」

「ザウエルといふ犬があるよ。しつぽがまるで箒のやうだ。ぼくが行くと鼻を鳴らしてついてくるよ。ずうつと町の角までついてくる。もつとついてくることもあるよ。今夜はみんなで烏瓜のあかりを川へながしに行くんだつて。きっと犬もついて行くよ。」

「さうだ。今晚は銀河のお祭だねえ。」

「うん。ぼく牛乳をとりながら見てくるよ。」

「あゝ行つておいで。□川へははいらないでね。」

「あゝぼく岸から見るだけなんだ。一時間で行つてくるよ。」

「もつと遊んでおいで。カムパネルラさんと一諸なら心配はないから。」

「あゝきつと一諸だよ。お母さん、窓をしめて置かうか。」

「あゝ、どうか。もう涼しいからね」

ジョバンニは立つて窓をしめお皿やパンの袋を片附けると勢よく靴をはいて

「では一時間半で帰ってくるよ。」と云ひながら暗い戸口を出ました。

〔四、〕 ケンタウル祭の夜

ジョバンニは、口笛を吹いてゐるやうなさびしい口付きで、檜のまつ黒にならんだ町の坂を下りて来たのでした。

坂の下に大きな一つの街燈が、青白く立派に光って立ってゐました。ジョバンニが、どんどん電燈の方へ下りて行きますと、いままでばけもののやうに、長くぼんやり、うしろへ引いてゐたジョバンニの影ぼうしは、だんだん濃く黒くはつきりなつて、足をあげたり手を振つたり、ジョバンニの横の方へまはつて来るのでした。

（ぼくは立派な機関車だ。ここは勾配だから速いぞ。ぼくはいまその電燈を通り越す。そうら、こんどはぼくの影法師はコムパスだ。あんなにくるつとまはつて、前の方へ来た。）

とジヨバンニが思ひながら、大股にその街燈の下を通り過ぎたとき、いきなりひるまのザネリが、新しいえりの尖ったシャツを着て電燈の向ふ側の暗い小路から出て来て、ひらつとジヨバンニとすれちがひました。

「ザネリ、烏瓜ながしに行くの。」ジヨバンニがまださう云つてしまはないうちに、

「ジヨバンニ、お父さんから、らつこの上着が来るよ。」その子が投げつけるやうにうしろから叫びました。

ジヨバンニは、ぼつと胸がつめたくなり、そこら中きいんと鳴るやうに思ひました。

「何だい。ザネリ。」とジヨバンニは高く叫び返しましたがもうザネリは向ふのひばの植つた家の中へはいつてゐました。

「ザネリはどうしてぼくがなんにもしないのにあんなことを云ふのだらう。走るときはまるで鼠のやうなくせに。ぼくがなんにもしないのにあんなことを云ふのはザネリがばかなからだ。」

ジヨバンニは、せはしくいろいろのことを考へながら、さまぎまの灯や木の枝で、すっかりきれいに飾られた街を通つて行きました。時計屋の店には明るくネオン燈がついて、一秒ごとに石でこさえたふくらふの赤い眼が、くるつくるつとうごいたり、いろいろな宝

石が海のやうな色をした厚い硝子の盤に載つて星のやうにゆつくり循環したり、また向ふ側から、銅の人馬がゆつくりこつちへまはつて来たりするのでした。そのまん中に円い黒い星座早見が青いアスパラガスの葉で飾つてありました。

ジヨバンニはわれを忘れて、その星座の図に見入りました。

それはひる学校で見たあの図よりはずうつと小さかったのですがその日と時間に合せて盤をまはすと、そのとき出てゐるそらがそのまゝ、「楕」円形のなかにめぐつてあらはれるやうになつて居りやはりそのまん中には上から下へかけて銀河がぼうとけむつたやうな帯になつてその下の方ではかすかに爆発して湯気でもあげてゐるやうに見えるのでした。またそのうしろには三本の脚のついた小さな望遠鏡が黄いろに光つて立つてゐました。いちばんうしろの壁には空ぢ「ゆ」うの星座をふしぎな獣や蛇や魚や瓶の形に書いた大きな図がかかつてゐました。ほんたうにこんなやうな蝸だの勇士だのそらにぎっしり居るだらうか、あゝぼくはその中をどこまでも歩いて見たいと思つてたりしてしばらくぼんやり立つて居ました。

それから俄かにお母さんの牛乳のことを思ひだしてジヨバンニはその店をはなれました。そしてきうくつな上着の肩を気にしながらそれでもわざと胸を張つて大きく手を振つて町

を通つて行きました。

空気は澄みきつて、まるで水のやうに通りや店の中を流れましたし、街燈はみなまつ青なもみや櫛の枝で包まれ、電気会社の前の六本のプラタヌスの木などは、中に沢山の豆電燈がついて、ほんたうにそこらは人魚の都のやうに見えるのでした。子どもらは、みんな新しい折のついた着物を着て、星めぐりの口笛を吹いたり、

「ケンタウルス、露をふらせ。」と叫んで走ったり、青いマグネシヤの花火を燃したりして、たのしさうに遊んでゐるのでした。けれどもジョバンニは、いつかまた深く首を垂れて、そこらのにぎやかさとはまるでちがったことを考へながら、牛乳屋の方へ「急ぐのでした。」

ジョバンニは、いつか町はづれのポプラの木が幾本も幾本も、高く星ぞらに浮んでゐるところに来てゐました。その牛乳屋の黒い門を入り、牛の匂のするうすくらい台所の前に立って、ジョバンニは帽子をぬいで「今晚は、」と云ひましたら、家の中はしいんとして誰も居たやうではありませんでした。

「今晚は、ごめんなさい。」ジョバンニはまつすぐに立つてまた叫びました。するとしばらくたつてから、年老つた女の人が、どこか工合が悪いやうにそろそろと出て来て何か用

かと口の中で云ひました。

「あの、今日、牛乳が僕とこへ来なかつたので、貰ひにあがつたんです。」ジヨバンニが一生けん命勢よく云ひました。

「いま誰もゐないでわかりません。あしたにして下さい。」

その人は、赤い眼の下のところを擦りながら、ジヨバンニを見おろして云ひました。

「おつかさんが病氣なんですから今晚でないと困るんです。」

「ではもう少したつてから来てください。」その人はもう行ってしまひさうでした。

「さうですか。ではありがたう。」ジヨバンニは、お辞義をして台所から出ました。

十字になつた町のかどを、まがらうとしましたら、向ふの橋へ行く方の雑貨店の前で、黒い影やぼんやり白いシャツが入り乱れて、六七人の生徒らが、口笛を吹いたり笑つたりして、めいめい烏瓜の燈火を持つてやつて来るのを見ました。その笑ひ声も口笛も、みんな聞きおぼえのあるものでした。ジヨバンニの同級の子供らだったので、ジヨバンニは思はずどきつとして戻らうとしましたが、思ひ直して、一さう勢よくそつちへ歩いて行きましました。

「川へ行くの。」ジヨバンニが云はうとして、少しのどがつまつたやうに思つたとき、

「ジヨバンニ、らつこの上着が来るよ。」さっきのザネリがまた叫びました。

「ジヨバンニ、らつこの上着が来るよ。」すぐみんなが、続いて叫びました。ジヨバンニはまっ赤になって、もう歩いてゐるかもわからず、急いで行きすぎやうとしましたら、そのなかにカムパネルラが居たのです。カムパネルラは気の毒さうに、だまって少しわらつて、怒らないだらうかといふやうにジヨバンニの方を見てゐました。

ジヨバンニは、遁げるやうにその眼を避け、そしてカムパネルラのせいの高いかたちが過ぎて行つて間もなく、みんなはてんでに口笛を吹きました。町かどを曲るとき、ふりかへつて見ましたら、ザネリがやはりふりかへつて見てゐました。そしてカムパネルラもまた、高く口笛を吹いて向ふにぼんやり橋の方へ歩いて行つてしまつたのでした。ジヨバンニは、なんとも云へずさびしくなつて、いきなり走り出しました。すると耳に手をあて、わああと云ひながら片足でびよんびよん跳んでゐた小さな子供らは、ジヨバンニが面白くてかけるのだと思つてわあいと叫びました。まもなくジヨバンニは□ 黒い丘の方へ急ぎました。

〔五、〕 天気輪の柱

牧場のうしろはゆるい丘になって、その黒い平らな頂上は、北の大熊星の下に、ぼんやりふだんよりも低く連つて見えました。

ジヨバンニは、もう露の降りかかった小さな林のこみちを、どんだんのぼつて行きました。まつくらな草や、いろいろな形に見えるやぶのしげみの間を、その小さなみちが、一すじ白く星あかりに照らしだされてあつたのです。草の中には、ぴかぴか青びかりを出す小さな虫もゐて、ある葉は青く□すかし出され、ジヨバンニは、さつきみんなの持つて行つた烏瓜のあかりのやうだとも思ひました。

そのまつ黒な、松や檜の林を越えると、俄かにがらんと空がひらけて、天の川がしらしらと南から北へ亘つてゐるのが見え、また頂の、天気輪の柱も見わけられたのでした。つりがねさうか野ぎくかの花が、そこらいちめんに、夢の中からでも薫りだしたといふやうに咲き、鳥が一足、丘の上を鳴き続けながら通つて行きました。

ジヨバンニは、頂の天気輪の柱の下に来て、どこどかするからだを、つめたい草に投げました。

町の灯は、暗の中をまるで海の底のお宮のけしきのやうにともり、子供らの歌ふ声や口

笛、きれぎれの叫び声もかすかに聞えて来るのでした。風が遠くで鳴り、丘の草もしづかにそよぎ、ジヨバンニの汗でぬれたシャツもつめたく冷されました。ジヨバンニは町のはづれから遠く黒くひろがった野原を見わたしました。

そこから汽車の音が聞えてきました。その小さな列車の窓は一列小さく赤く見え、その中にはたくさんの旅人が、苹果を剥いたり、わらったり、いろいろな風にしてゐると考へますと、ジヨバンニは、もう何とも云へずかなしくなつて、また眼をそらに挙げました。

あゝあの白いそらの帯がみんな星「だ」といふぞ。」

ところがいくから見ても、そのそらはひる先生の云つたやうな、がらんとした冷いところとは思はれませんでした。それどころでなく、見れば見るほど、そこは小さな林や牧場やある野原のやうに考へられて仕方なかつたのです。そしてジヨバンニは青い琴の星が、三つにも四つにもなつて、ちらちら瞬き、脚が何べんも出たり引つ込んだりして、たうたう蕈のやうに長く延びるのを見ました。またすぐ眼の下のまぢまでがやっぱりぼんやりしたたくさんの星の集りか一つの大きなけむりかのやうに見えるやうに思ひました。

〔六、〕 銀河ステーション

そしてジヨバンニはすぐうしろの天気輪の柱がいつかぼんやりした三角標の形になって、しばらく蛍のやうに、ペカペカ消えたりともったりしてゐるのを見ました。それはだんだんはつきりして、たうたうりんとうごかないやうになり、濃い鋼青のそらの野原にたちました。いま新らしく灼いたばかりの青い鋼の板のやうな、そらの野原に、まっすぐにすきつと立つたのです。

するとどこかで、ふしぎな声が、銀河ステーション、銀河ステーション「シヨン」と云ふ声でしたと思ふといきなり眼の前が、ぱつと明るくなって、まるで億万の蛍鳥賊の火を一ぺんに化石させて、そら中に沈めたといふ工合、またダイヤモンド会社で、ねだんがやすくならないために、わざと穫れないふりをして、かくして置いた金剛石を、誰かがいきなりひっくりかへして、ばら撒いたといふ風に、眼の前がさあつと明るくなって、ジヨバンニは、思はず何べんも眼を擦ってしまひました。

気がついてみると、さつきから、ごとごとごとごと、ジヨバンニの乗つてゐる小さな列車が走りつづけてゐたのでした。ほんたうにジヨバンニは、夜の軽便鉄道の、小さな黄いろの電燈のなんだ車室に、窓から外を見ながら座つてゐたのです。車室の中は、青い天

蚕絨を張った腰掛けが、まるでがら明きで、向ふの鼠いろのワニスを塗った壁には、真鍮の大きなぼたんが二つ光つてゐるのでした。

すぐ前の席に、ぬれたやうにまつ黒な上着を着た、せいの高い子供が、窓から頭を出して外を見てゐるのに気が付きました。そしてそのこどもの肩のあたりが、どうも見たことのあるやうな気がして、さう思ふと、もうどうしても誰だかわかりたくて、たまらなくなりました。いきなりこつちも窓から顔を出さうとしたとき、俄かにその子供が頭を引っ込めて、こつちを見ました。

それはカムパネルラだったのです。

ジヨバンニが、カムパネルラ、きみは前からこゝに居たのと云はうと□□思つたとき、カムパネルラが

「みんなはねずるぶん走つたけれども遅れてしまつたよ。ザネリもね、ずるぶん走つたけれども追ひつかかなかつた。」と云ひました。

ジヨバンニは、（さうだ、ぼくたちはいま、いっしょにさそつて出掛けたのだ。）とおもひながら、

「どこかで待つてゐやうか。」と云ひました。するとカムパネルラは

「ザネリはもう帰ったよ。お父さんが迎ひにきたんだ。」

カムパネルラは、なぜかさう云ひながら、少し顔いろが青ざめて、どこか苦しいといふふうでした。するとジョバンニも、なんだかどこかに、何か忘れたものがあるといふやうな、おかしな気持ちが出てしまっていました。

ところがカムパネルラは、窓から外をのぞきながら、もうすっかり元気が直って、勢よく云ひました。

「あゝしまった。ぼく、水筒を忘れてきた。スケッチ帳も忘れてきた。けれど構はない。もうぢき白鳥の停車場だから。ぼく、白鳥を見るなら、ほんたうにすきだ。川の遠くを飛んでゐたつて、ぼくはきつと見える。」そして、カムパネルラは、円い板のやうになつた地図を、しきりにぐるぐるまはして見てゐました。まったくその中に、白くあらはされた天の川の左の岸に沿って一条の鉄道線路が、南へ南へとたどって行くのでした。そしてその地図の立派なことは、夜のやうにまつ黒な盤の上に、一一の停車場や三角標、泉水や森が、青や橙や緑や、うつくしい光でちりばめられてありました。ジョバンニはなんだかその地図をどこかで見たやうにおもひました。

「この地図はどこで買ったの。黒曜石でできてるねえ。」

ジヨバンニが云ひました。

「銀河ステーションで、もらったんだ。君もらはなかったの。」

「あゝ、ぼく銀河ステーションを通つたらうか。いまぼくたちの居るところ、ここだらう。」
ジヨバンニは、白鳥と書いてある停車場のしるしの、すぐ北を指しました。

「さうだ。おや、あの河原は月夜だらうか。」そつちを見ますと、青白く光る銀河の岸に、銀いろの空のすゝきが、もうまるでいちめん、風にさらさらさらさら、ゆられてうごいて、波を立ててゐるのですた。

「月夜でないよ。銀河だから光るんだよ。」ジヨバンニは云ひながら、まるでね上りたいくらゐ愉快になつて、足をこつこつ鳴らし、窓から顔を出して、高く高く星めぐりの口笛を吹きながら一生けん命延びあがつて、その天の川の水を、見きはめやうとしましたが、はじめはどうしてもそれが、はつきりしませんでした。けれどもだんだん気をつけて見ると、そのきれいな水は、ガラスよりも水素よりもすきとほつて、ときどき眼の加減か、ちらちら紫いろのこまかな波をたてたり、虹のやうにぎらつと光つたりしながら、声もなくどンドン流れて行き、野原にはあつちにもこつちにも、燐光の三角標が、うつくしく立つてゐたのです。遠いものは小さく、近いものは大きく、遠いものは橙や黄いろではつきり

し、近いものは青白く少しかすんで、或ひは三角形、或ひは四辺形、あるひは電や鎖の形、さまざまにならんで、野原いっぱい光つてゐるのでした。ジヨバンニは、まるでどきどきして、頭をやけに振りましました。するとほんたうに、そのきれいな野原中の青や橙や、いろいろかゞやく三角標も、てんでに息をつくやうに、ちらちらゆれたり顫へたりしました。「ぼくはもう、すっかり天の野原に來た。」ジヨバンニは云ひました。「それに□この汽車石炭をたいてゐないねえ。」ジヨバンニが左手をつき出して窓から前の方を見ながら云ひました。

「アルコールか電気だらう。」カムパネルラが云ひました。□

「ごごとごとごとごと、その小さなきれいな汽車は、そらのすゝきの風にひるがへる中を、天の川の水や、三角点の青じろい微光の中を、どこまでもどこまでもと、走って行くのでした。」

「あゝ、りんだうの花が咲いてゐる。もうすっかり秋だねえ。」カムパネルラが、窓の外を指さして云ひました。

線路のへりになつたみぢかい芝草の中に、月長石でも刻まれたやうな、すばらしい紫のりんだうの花が咲いてゐました。

「ぼく、飛び下りて、あいつをとって、また飛び乗ってみせやうか。」ジヨバンニは胸を躍らせて云ひました。

「もうだめだ。あんなにうしろへ行ってしまったから。」

カムパネルラが、さう云ってしまふかしまはないうち、次のりんだうの花が、いつぱいに光って過ぎて行きました。

と思つたら、もう次から次から、たくさんのきいろな底をもったりんだうの花のコツプが、湧くやうに、雨のやうに、眼の前を通り、三角標の列は、けむるやうに燃えるやうに、いよいよ光って立ったのです。

〔七、〕 北十字きたじふじとプリオシン海岸

「おつかさんは、ぼくをゆるして下さるだらうか。」

いきなり、カムパネルラが、思ひ切ったといふやうに、少しどもりながら、急きこんで云ひました。

ジヨバンニは、

（あゝ、さうだ、ぼくのおつかさんは、あの遠い一つのちりのやうに見える橙いろの三角標のあたりにゐらっしゃって、いまぼくのことを考へてゐるんだつた。）と思ひながら、ぼんやりしてだまつてゐました。

「ぼくはおつかさんが、ほんたうに幸になるなら、どんなことでもする。けれども、いったいどんなことが、おつかさんのいちばんの幸なんだらう。」カムパネルラは、なんだか、泣きだしたいのを、一生けん命こらえてゐるやうでした。

「きみのおつかさんは、なんにもひどいことないぢやないの。」ジヨバンニはびっくりして叫びました。

「ぼくわからない。けれども、誰だつて、ほんたうにいいことをしたら、いちばん幸なんだねえ。だから、おつかさんは、ぼくをゆるして下さいと思ふ。」カムパネルラは、なにかほんたうに決心してゐるやうに見えました。

俄かに、車のなかで、ぱつと白く明るくなりました。見ると、もうじつに、金剛石や草の露やあらゆる立派さをあつめたやうな、きらびやかな銀河の河床の上を水は声もなくかたちもなく流れ、その流れのまん中に、ぼうつと青白く後光の射した一つの島が見えるのでした。その島の平らなただきに、立派な眼もさめるやうな、白い十字架がたつて、そ

れはもう凍った北極の雲で鑄たといったらいゝか、すきつとした金いろの円光をいただいて、しづかに永久に立ってゐるのでした。

「ハルレヤ、ハルレヤ。」前からもうしろからも声がありました。ふりかへって見ると、車室の中の旅人たちは、みなまっすぐにきものひだを垂れ、黒いバイブルを胸にあてたり、水晶の珠数をかけたり、どの人もつましく指を組み合せて、そっちに祈ってゐるのでした。思はず二人もまっすぐに立ちあがりました。カムパネルラの頬は、まるで熟した苹果のあかしのやうにうつくしくかゞやいて見えました。

そして島と十字架とは、だんだんうしろの方へうつって行きました。

向ふ岸も、青じろくぼうつと光つてけむり、時々、やっぱりすすきが風にひるがへるらしく、さつとその銀いろがけむつて、息でもかけたやうに見え、また、たくさんのりんだうの花が、草をかくれたり出たりするのは、やさしい狐火のやうに思はれました。

それもほんのちよつとの間、川と汽車との間は、すすきの列でさへぎられ、白鳥の島は、二度ばかり、うしろの方に見えましたが、ぢきもうずうつと遠く小さく、絵のやうになつてしまひ、またすゝきがざわざわ鳴つて、たうたうすつかり見えなくなつてしまひました。ジヨバンニのうしろには、いつから乗つてゐたのか、せいの高い、黒いかつぎをしたカト

リック風の尼さんが、まん円な緑の瞳を、じっとまっすぐに落して、まだ何かことばか声かが、そつちから伝はつて来るのを、度んで聞いてゐるといふやうに見えました。旅人たちはしづかに席に戻り、二人も胸いっぱいのかなしみに似た新らしい気持ち、何気なくちがった語で、そつと談し合つたのです。

「もうぢき白鳥の停車場だねえ。」

「あゝ、十一時かつきりには着くんだよ。」

早くも、シグナルの緑の燈と、ぼんやり白い柱とが、ちらつと窓のそとを過ぎ、それから硫黄のほのほのやうなくらいぼんやりした転てつ機の前のあかりが窓の下を通り、汽車はだんだんゆるやかになつて、間もなくプラットホームの一系列の電燈が、うつくしく規則正しくあらはれ、それがだんだん大きくなつてひろがつて、二人は丁度白鳥停車場の、大きな時計の前に来てとまりました。

さわやかな秋の時計の盤面には、青く灼かれたはがねの二本の針が、くつきり十一時を指しました。みんなは、一ぺんに下りて、車室の中はがらんとつてしまひました。

「二十分停車」と時計の下に書いてありました。

「ぼくたちも降りて見やうか。」ジヨバンニが云ひました。

「降りやう。」二人は一度にはねあがつてドアを飛び出して改札口へかけて行きました。ところが改札口には、明るい紫がかつた電燈が、一ツ点いてゐるばかり、誰も居ませんでした。そこから中を見ても、駅長や赤帽らしい人の、影もなかったのです。

二人は、停車場の前の、水晶細工のやうに見える銀杏の木に囲まれた、小さな広場に出ました。そこから幅の広いみちが、まっすぐに銀河の青光の中へ通つてゐました。

さきに降りた人たちは、もうどこへ行つたか一人も見えませんでした。二人がその白い道を、肩をならべて行きますと、二人の影は、ちやうど四方に窓のある室の中の、二本の柱の影のやうに、また二つの車輪の輻のやうに幾本も幾本も四方へ出るのです。そして間もなく、あの汽車から見えたきれいな河原に來ました。

カムパネルラは、そのきれいな砂を一「つ」まみ、掌にひろげ、指できしきしさせながら、夢のやうに云つてゐるのでした。

「この砂はみんな水晶だ。中で小さな火が燃えてゐる。」

「さうだ。」どこでぼくは、そんなこと習つたらうと思ひながら、ジヨバンニもぼんやり答へてゐました。

河原の礫は、みんなすきとほつて、たしかに水晶や黄玉や、またくしゃくしゃの皺曲を

あらはしたのや、また稜から霧のやうな青白い光を出す鋼玉やらでした。ジョバンニは、走つてその渚に行つて、水に手をひたしました。けれどもあやしいその銀河の水は、水素よりもつとすきとほつてゐたのです。それでもたしかに流れてゐたことは、二人の手首の、水にひたつたところが、少し水銀いろに浮いたやうに見え、その手首にぶつつかつてできた波は、うつくしい燐光をあげて、ちらちらと燃えるやうに見えたのもわかりました。

川上の方を見ると、すすきのいっばいに生えてゐる崖の下に、白い岩が、まるで運動場のやうに平らに川に沿つて出てゐるのです。そこに小さな五六人の人かげが、何か堀り出すか埋めるかしてゐるらしく、立つたり屈んだり、時々なにかの道具が、ピカツと光つたりしました。

「行つてみやう。」二人は、まるで一度に叫んで、そつちの方へ走りました。その白い岩になつた処の入口に、「プリオシン海岸」といふ、瀬戸物のつるつるした標札が立つて、向ふの渚には、ところどころ、細い鉄の欄干も植えられ、木製のきれいなベンチも置いてありました。

「おや、変なものがあるよ。」カムパネルラが、不思議さうに立ちどまって、岩から黒い細長いさきの尖つたくるみの実のやうなものをひろひました。

「くるみの実だよ。そら、沢山ある。流れて来たんぢやない。岩の中に入ってるんだ。」
「大きいね、このくるみ、倍あるね。こいつはすこしもいたんでない。」

「早くあすこへ行つて見やう。きつと何か堀つてるから。」

二人は、ぎざぎざの黒いくるみの実を持ちながら、またさつきの方へ近よつて行きました。左手の渚には、波がやさしい稲妻のやうに燃えて寄せ、右手の崖には、いちめん銀や貝殻でこさえたやうなすすきの穂がゆれたのです。

だんだん近付いて見ると、一人のせいの高い、ひどい近眼鏡をかけ、長靴をはいた学者らしい人が、手帳に何かせわしさうに書きつけながら、鶴つるはし嘴をふりあげたり、スコープをつかつたりしてゐる、三人の助手らしい人たちに夢中でいろいろ指図をしてゐました。

「そのその突起を壊さないやうに。スコープを使ひたまへ、スコープを。おつと、もう少し遠くから堀つて。いけない、いけない。なぜそんな乱暴をするんだ。」

見ると、その白い柔らかな岩の中から、大きな大きな青じろい獣の骨が、横に倒れて潰れたといふ風になつて、半分以上堀り出されてゐました。そして気をつけて見ると、そこらには、蹄の二つある足跡のついた岩が、四角に十ばかり、きれいに切り取られて番号がつけられてありました。

「君たちは参観かね。」その大学士らしい人が、眼鏡をきらつとさせて、こつちを見て話しかけました。「くるみが沢山あつたらう。それはまあ、ざつと百二十万年ぐらゐ前のくるみだよ。ごく新らしい方さ。ここは百二十万年前、第三紀のあとのころは海岸でね、この下からは貝がらも出る。いま川の流れてゐるとこに、そつくり塩水が寄せたり引いたりもしてゐたのだ。このけものかね、これはボスといつてね、おいおい、そこつるはしはよしたまへ。ていねいに鑿でやつてくれたまへ。ボス（と）」いつてね、いまの牛の先祖で、昔はたくさん居たさ。」

「標本にするんですか。」

「いや、証明するに要るんだ。ぼくらからみると、ここは厚い立派な地層で、百二十万年ぐらゐ前にできたといふ証拠もいろいろあがるけれども、ぼくらとちがつたやつからみてもやつぱりこんな地層に見えるかどうか、あるひは風か水やがらんとした空かに見えやしないかといふことなのだ。わかつたかい。けれども、おいおい。そこもスコープではいけない。そのすぐ下に肋骨が埋もれてる筈ぢやないか。」大学士はあはてゝ走つて行きました。

「もう時間だよ。行かう。」カムパネルラが地図と腕時計とをくらべながら云ひました。

「ああ、ではわたくしどもは失礼いたします。」ジヨバンニは、ていねいに大学士におぢぎしました。

「さうですか。いや、さよなら。」大学士は、また忙がしきうに、あちこち歩きまはつて監督をはじめました。

二人は、その白い岩の上を、一生けん命汽車におくれないやうに走りました。そしてほんたうに、風のやうに走れたのです。息も切れず膝もあつくありませんでした。

こんなにかけるなら、もう世界中だつてかけられると、ジヨバンニは思ひました。

そして二人は、前のあの河原を通り、改札口の電燈がだんだん大きくなって、間もなく二人は、もとの車室の席に座つて、いま行つて来た方を、窓から見てゐました。

「八、」 鳥を捕る人

「ここへかけてもようございますか。」

がさがさした、けれども親切さうな、大人の声が、二人のうしろで聞えました。

それは、茶いろの少しぼろぼろの外套を着て、白い巾でつつんだ荷物を、二つに分けて

肩に掛けた、赤髯のせなかのかがんだ人でした。

「えゝ、いゝんです。」ジョバンニは、少し肩をすぼめて挨拶しました。その人は、ひげの中でかすかに微笑ひながら、荷物をゆつくり網棚にのせました。ジョバンニは、なにか大へんさびしいやうなかなしいやうな気がして、だまって正面の時計を見てみましたら、ずうつと前の方で、硝子の笛のやうなものが鳴りました。汽車はもう、しづかにうごいてゐたのです。カムパネルラは、車室の天井を、あちこち見てゐました。その一つのあかりに黒い甲虫がとまってその影が大きく天井にうつつてゐたのです。赤ひげの人は、なにかなつかしさうにわらひながら、ジョバンニやカムパネルラのやうすを見てゐました。汽車はもうだんだん早くなつて、すすきと川と、かはるがはる窓の外から光りました。

赤ひげの人が、少しおづおづしながら、二人に訊きました。

「あなた方は、どちらへ入らっしゃるんですか。」

「どこまでも行くんです。」ジョバンニは、少しきまり悪さうに答へました。

「それはいいね。この汽車は、じつさい、どこまでも行きますぜ。」

「あなたはどこへ行くんです。」カムパネルラが、いきなり、喧嘩のやうにたづねましたので、ジョバンニは、思はずわらひました。すると、向ふの席に居た、尖った帽子をかぶ

り、大きな鍵を腰に下げた人も、ちらつとこつちを見てわらひましたので、カムパネルラも、つい顔を赤くして笑ひだしてしまひました。ところがその人は別に怒つたでもなく、頬をびくびくしながら返事しました。

「わつしはすぐそこで降ります。わつしは、鳥をつかまへる商売でね。」

「何鳥ですか。」

「鶴や雁です。さぎも白鳥もです。」

「鶴はたくさんゐますか。」

「居ますとも、さつきから鳴いてまさあ。聞かなかつたのですか。」

「いゝえ。」

「いまでも聞えるぢやありませんか。そら、耳をすまして聴いてごらんなさい。」

二人は眼を挙げ、耳をすましました。ごとごと鳴る汽車のひびきと、すすきの風との間から、ころんころんと水の湧くやうな音が聞えて来るのでした。

「鶴、どうしてとるんですか。」

「鶴ですか、それとも鷺ですか。」

「鷺です。」 ジョバンニは、どっちでもいいと思ひながら答へました。

「そいつはな、雑作ない。さぎといふものは、みんな天の川の砂が凝って、ぼおつとできるもんですからね、そして始終川へ帰りますからね、川原で待ってゐて、鷺がみんな、脚をかういふ風にして下りてくるところを、そいつが地べたへつくかつかないうちに、ぴたと押へちまふんです。するともう鷺は、かたまつて安心して死んぢまひます。あとはもう、わかり切つてまさあ。押し葉にするだけです。」

「鷺を押し葉にするんですか。標本ですか。」

「標本ぢやありません。みんなたべるぢやありませんか。」

「おかしいねえ。」カムパネルラが首をかしげました。

「おかしいも不審もありませんや。そら。」その男は立つて、網棚から包みをおろして、手ばやくくるくると解きました。「さあ、ごらんさい。いまとつて来たばかりです。」

「ほんたうに鷺だねえ。」二人は思はず叫びました。まっ白な、あのさっきの北の十字架のやうに光る鷺のからだだが、十ばかり、少しひらべつたくなつて、黒い脚をちぢめて、浮彫のやうにならんでゐたのです。

「眼をつぶつてるね。」カムパネルラは、指でそつと、鷺の三日月がたの白い瞑つた眼にさわりました。頭の上の檜のやうな白い毛もちやんとついてゐました。

「ね、さうでせう。」鳥捕りは風呂敷を重ねて、またくるくと包んで紐でくくりました。誰がいったいこころで鷺なんぞ喰べるだらうとジヨバンニは思ひながら訊きました。

「鷺はおいしいんですか。」

「え、毎日注文があります。しかし雁の方が、もつと売れます。雁の方がずっと柄がよいし、第一手数がありませんからな。そら。」鳥捕りは、また別の方の包みを解きました。すると黄と青じろとまだらになつて、なにかのあかりのやうにひかる雁が、ちやうどさつきの鷺のやうに、くちばしを揃へて、少し扁べつたくなつて、ならんでゐました。

「こつちはすぐ喰べられます。どうです、少しおあがりなさい。」鳥捕りは、黄いろな雁の足を、軽くひつぱりました。するとそれは、チヨコレートでもできてゐるやうに、すつときれいにはなれました。

「どうです。すこしたべてごらんなさい。」「」鳥捕りは、それを二つにちぎつてわたししました。ジヨバンニは、ちよつと喰べてみて、（なんだ、やっぱりこいつはお菓子だ。」「）チヨコレートよりも、もつとおいしいけれども、こんな雁が飛んでゐるもんか。この男は、どこかそこらの野原の菓子屋だ。けれどもぼくは、このひとをばかにしながら、この人のお菓子をたべてゐるのは、大へん気の毒だ。」とおもひながら、やっぱりぼくぼくそれを

たべてゐました。

「も少しおあがりなさい。」鳥捕りがまた包みを出しました。ジヨバンニは、もっとたべたかつたのですけれども、

「えゝ、ありがたう。」と云つて遠慮しましたら、鳥捕りは、こんどは向ふの席の、鍵をもつた人に出しました。

「いや、商売ものを貰つちやすみませんな。」その人は、帽子をとりました。

「いゝえ、どういたしまして。どうです、今年の渡り鳥の景気は。」

「いや、すてきなもんですよ。一昨日の第二限ころなんか、なぜ燈台の灯を、規則以外に間〔一字分空白〕させるかつて、あつちからもこつちからも、電話で故障が来ましたが、なあに、こつちがやるんぢやなくて、渡り鳥どもが、まっ黒にかたまつて、あかしの前を通るのですから仕方ありませんや。わたしあ、べらぼうめ、そんな苦情は、おれのところへ持つて来たつて仕方がねえや、ばさばさのマントを着て脚と口との途方もなく細い大将へやれつて、斯う云つてやりましたがね、はっは。」

すすきがなくなつたために、向ふの野原から、ぱつとあかりが射して来ました。

「鷺の方はなぜ手数なんですか。」カムパネルラは、さつきから、訊かうと思つてゐたの

です。

「それはね、鷺を喰べるには、」鳥捕りは、こつちに向き直りました。「天の川の水あかりに、十日もつるして置くかね、さうでなけあ、砂に三四日うづめなけあいけないだ。さうすると、水銀がみんな蒸発して、喰べられるやうになるよ。」

「こいつは鳥ぢやない。たゞのお菓子でせう。」やっぱりおなじことを考へてゐたとみえて、カムパネルラが、思ひ切つたといふやうに、尋ねました、鳥捕りは、何か大へんあわてた風で、

「さうさう、ここで降りなけあ。」と云ひながら、立って荷物をとつたと思ふと、もう見えなくなつてゐました。

「どこへ行つたんだらう。」二人は顔を見合せましたら、燈台守は、にやにや笑つて、少し伸びあがるやうにしながら、二人の横の窓の外をのぞきました。二人もそつちを見ましたら、たつたいまの鳥捕りが、黄いろと青じろの、うつくしい燐光を出す、いちめんのかはらははこぐさの上に立つて、まじめな顔をして両手をひろげて、じつとそらを見てゐたのです。

「あすこへ行つてる。ずるぶん奇体だねえ。きつとまた鳥をつかまへるとこだねえ。汽車

が走つて行かないうちに、早く鳥がおけるといゝな。」と云つた途端、がらんとした桔梗
いろの空から、さつき見たやうな鷺が、まるで雪の降るやうに、ぎやあぎやあ叫びながら、
いっぱい舞ひおりて来ました。するとあの鳥捕りは、すっかり注文通りだといふやうに
ほくほくして、両足をかつきり六十度に開いて立って、鷺のちぢめて降りて来る黒い脚を
両手で片っ端から押へて、布の袋の中に入れるのでした。すると鷺は、螢のやうに、袋の
中でしばらく、青くペかペか光つたり消えたりしてゐましたが、おしまひたうたう、みん
なぼんやり白くなつて、眼をつぶるのでした。ところが、つかまへられる鳥よりは、つか
まへられないで無事に天の川の砂の上に降りるものの方が多かったです。それは見てゐ
ると、足が砂へつくや否や、まるで雪の融けるやうに、縮まって扁べつたくなつて、間も
なく熔鉱炉から出た銅の汁のやうに、砂や砂利の上にひろがり、しばらくは鳥の形が、砂
についてゐるのでした。それも二三度明るくなつたり暗くなつたりしてゐるうちに、も
うすっかりまはりと同じいろになつてしまふのでした。

鳥捕りは二十足ばかり、袋に入れてしまふと、急に両手をあげて、兵隊が鉄砲弾にあた
つて、死ぬときのやうな形をしました。と思つたら、もうそこに鳥捕りの形はなくなつて、
却つて、

「あゝせいせいした。どうもからだに恰度合ふほど稼いでゐるくらゐ、いゝことはありませんな。」といふききおぼえのある声が、ジヨバンニの隣りにしました。見ると鳥捕りはもうそこでとつて来た鷺を、きちんとそろへて、一つづつ重ね直してゐるのでした。

「どうしてあすこから、いつぺんにこゝへ来たんですか。」ジヨバンニが、なんだかあたりまへのやうな、あたりまへでないやうな、おかしな気がして問ひました。

「どうしてつて、来やうとしたから来たんです。ぜんたいあなた方は、どちらからおいでですか。」

ジヨバンニは、すぐ返事しやうと思ひましたけれども、さあ、ぜんたいどこから来たのか、もうどうしても考へつきませんでした。カムパネルラも、頬をまっ赤にして何か思ひ出さうとしてゐるのでした。

「あゝ、遠くからですね。」鳥捕りは、わかつたといふやうに雑作なくうなづきました。

〔九、〕ジヨバンニの切符

「もうこゝらは白鳥区のおしまひです。ごらんなさい。あれが名高いアルビレオの観測所

です。」

窓の外の、まるで花火でいっぱいのような、あまの川のまん中に、黒い大きな建物が四棟ばかり立って、その一つの平屋根の上に、眼もさめるような、青宝玉と黄玉の大きな二つのすきとほった球が、輪になってしづかにくるとまはってゐました。黄いろのがだんだん向ふへまはって行つて、青い小さいのがこつちへ進んで来、間もなく二つのはじは、重なり合つて、きれいな緑いろの両面凸レンズのかたちをつくり、それもだんだん、まん中がふくらみ出して、たうたう青いのは、すっかりトパスの正面に来ましたので、緑の中心と黄いろな明るい環とができました。それがまただんだん横へ外れて、前のレンズの形を逆に「線」り返し、たうたうすつとはなれて、サファイアは向ふへめぐり、黄いろのはこつちへ進み、また丁度さつきのやうな風になりました。銀河の、かたちもなく音もない水にかこまれて、ほんたうにその黒い測候所が、睡つてゐるやうに、しづかによこたはつたのです。

「あれは、水の速さをはかる器械です。水も……。」鳥捕りが云ひかけたとき、

「切符を拝見いたします。」三人の席の横に、赤い帽子をかぶつたせいの高い車掌が、いつかまっすぐに立つてゐて云ひました。鳥捕りは、だまつてかくしから、小さな紙きれを

出しました。車掌はちよつと見て、すぐ眼をそらして、（あなた方のは？）といふやうに、指をうごかしながら、手をジョバンニたちの方へ出しました。

「さあ、」ジョバンニは困つて、もぢもぢしてゐましたら、カムパネルラは、わけもないといふ風で、小さな鼠いろの切符を出しました。ジョバンニは、すっかりあはててしまつて、もしか上着のポケットにでも、入つてゐたかとおもひながら、手を入れて見ましたら、何か大きな畳んだ紙きれにあたりました。こんなもの入つてゐたらうかと思つて、急いで出してみしたら、「□それは四つに折つたはがきぐらゐの大きな緑いろの紙でした。車掌が手を出してゐるもんですから何でも構はない、やっちまへと思つて渡しましたら、車掌はまつすぐに立ち直つて丁寧になんかそれを開いて見てゐました。そして読みながら上着のぼたんやなんかしきりに直したりしてゐましたし燈台看守も下からそれを熱心にのぞいてゐましたから、ジョバンニはたしかにあれば証明書か何かだったと考へて少し胸が熱くなるやうな気がしました。

「これは三次空間の方からお持ちになつたのですか。」車掌がたづねました。

「何だかわかりません。」もう大丈夫だと安心しながらジョバンニはそつちを見あげてくつくつ笑ひました。

「よろしうございます。南十字へ着きますのは、次の第三時ころになります。」車掌は紙をジヨバンニに渡して向ふへ行きました。

カムパネルラは、その紙切れが何だったか待ち兼ねたといふやうに急いでのできこみました。ジヨバンニも全く早く見たかったです。ところがそれはいちめん黒い唐草のやうな模様の中に、おかしな十ばかりの字を印刷したものでだまって見てみると何だかその中へ吸ひ込まれてしまふやうな気がするのです。すると鳥捕りが横からちらつとそれを見てあはてたやうに云ひました。

「おや、こいつは大したもんですぜ。こいつはもう、ほんたうの天上へさへ行ける切符だ。天上どこぢやない、どこでも勝手にあるける通行券です。こいつをお持ちになれば、なるほど、こんな不完全な幻想第四次の銀河鉄道なんか、どこまででも行ける筈でさあ、あなた方大したもんですね。」

「何だかわかりません。」ジヨバンニが赤くなつて答へながらそれを又畳んでかくしに入れました。そしてきまりが悪いのでカムパネルラと二人、また窓の外をながめてみました。その鳥捕りの時々大したもんだといふやうにちらちらこつちを見てゐるのがぼんやりわかりました。

「もうぢき鷺の停車場だよ。」カムパネルラが向ふ岸の、三つならんだ小さな青じろい三角標と地図とを見較べて云ひました。

ジヨバンニはなんだかわけもわからずににはかにとりの鳥捕りが気の毒でたまらなくなりまして。鷺をつかまへてせいせいしたとよろこんだり、白いきれでそれをくるくる包んだり、ひとの切符をびつくりしたやうに横目で見てあはてゝほめだしたり、そんなことを一一考へてゐると、もうその見ず知らずの鳥捕りのために、ジヨバンニの持つてゐるものでも食べるものでもなんでもやってしまひたい、もうこの人のほんたうの幸になるなら自分があの光る天の川の河原に立つて百年つゞけて立つて鳥をとってやってもいゝといふやうな気がして、どうしてももう黙つてゐられなくなりました。ほんたうにあなたのほしいものは一体何ですか、と訊かうとして、それではあんまり出し抜けだから、どうせうかと考へて振り返つて見ましたら、そこにはもうあの鳥捕りが居ませんでした。網棚の上には白い荷物も見えなかつたのです。また窓の外で足をふんばつてそらを見上げて鷺を捕る支度をしてゐるのかと思つて、急いでそちを見ましたが、外はいちめんのうつくしい砂子と白いすゝきの波ばかり、あの鳥捕りの広いせなかも尖った帽子も見えませんでした。「あの人どこへ行つたらう。」カムパネルラもぼんやりさう云つてゐました。

「どこへ行つたらう。一体どこでまたあふのだらう。僕はどうしても少しあの人に物を言はなかつたらう。」

「あゝ、僕もさう思つてゐるよ。」

「僕はある人が邪魔なやうな気がしたんだ。だから僕は大へんつらい。」ジョバンニはこんな変てこな気もちは、ほんたうにはじめてだし、こんなこと今まで云つたこともないと思ひました。

「何だか苹果の匂がする。僕いま苹果のこと考へたためだらうか。」カンパネルラが不思議さうにあたりを見まはしました。

「ほんたうに苹果の匂だよ。それから野茨の匂もする。」ジョバンニもそこらを見まはしたがやっぱりそれは窓からでも入つて来るらしいのでした。いま秋だから野茨の花の匂のする筈はないとジョバンニは思ひました。

そしたら俄かにそこに、つやつやした黒い髪の六つばかりの男の子が赤いジャケットのぼたんもかけずひどくびっくりしたやうな顔をしてがたがたふるえてはだしで立つてゐました。隣りには黒い洋服をきちんと着たせいの高い青年が一ぱいに風に吹かれてゐるけやきの木のやうな姿勢で、男の子の手をしっかりとひいて立つてゐました。

「あら、こゝどこでせう。まあ、きれいだわ。」青年のうしろにもひとり十二ばかりの眼の茶いろな可愛らしい女の子が黒い外套を着て青年の腕にすがって不思議さうに窓の外を見てゐるのでした。

「ああ、こゝはランカシャイヤだ。いや、コンネクテカツト州だ。いや、ああ、ぼくたちはそらへ来たのだ。わたしたちは天へ行くのです。ごらんなさい。あのしるしは天上のしるしです。もうなんにも□□こわいことありません。わたくしたちは神さまに召されてゐるのです。□□」黒服の青年はよろこびにかゞやいてその女の子に云ひました。けれどもなぜかまた額に深く皺を刻んで、それに大へんつかれてゐるらしく、無理に笑ひながら男の子をジヨバンニのとなりに座らせました。

それから女の子にやさしくカムパネルラのとなりの席を指さしました。女の子はすなほにそこへ座つて、きちんと両手を組み合せました。

「ぼくおほねえさんのとこへ行くんだよう。」腰掛けたばかりの男の子は顔を変にして燈台看守の向ふの席に座つたばかりの青年に云ひました。青年は何とも云へず悲しげな顔をして、ちつとその子の、ちぢれてぬれた頭を見ました。女の子は、いきなり両手を顔にあて、しくしく泣いてしまひました。

「お父さんやきくよねえさんはまだいろいろお仕事があるのです。けれどももうすぐあとからいらつしやいます。それよりも、おつかさんはどんなに永く待つてゐらつしやつたでせう。わたしの大事なタダシはいまどんな歌をうたつてゐるだらう、雪の降る朝にみんなと手をつないでぐるぐるにはとこのやぶをまはつてあそんでゐるだらうかと考へたりほんたうに待つて心配してゐらつしやるんですから、早く行つておつかさんにお目にかゝりませうね。」

「うん、だけど僕、船に乗らなけあよかつたなあ。」

「えゝ、けれど、ごらんなさい、そら、どうです、あの立派な川、ね、あすこはあの夏中、ツギンクル、ツギンクル、リトル、スター をうたつてやすむとき、いつも窓からぼんやり白く見えてゐたでせう。あすこですよ。ね、きれいでせう、あんなに光つてゐます。」

泣いてゐた姉もハンケチで眼をふいて外を見ました。青年は教へるやうにそつと姉弟にまた云ひました。

「わたし「た」ちはもうなんにもかなしいことないのです。わたしたちはこんないゝところを旅して、ぢき神さまのそこへ行きます。そこならもうほんたうに明るくて匂がよくて立派な人たちでいっばいです。そしてわたしたちの代りにボートへ乗れた人たちは、きつと

みんな助けられて、心配して待つてゐるめいめいのお父さんやお母さんや自分のお家へや
ら行くのです。さあ、もうぢきですから元氣を出しておもしろくうたつて行きませう。」
青年は男の子のぬれたやうな黒い髪をなで、みんなを慰めながら、自分もだんだん顔いろ
がかゞやいて来ました。

「あなた方はどちらからいらつしやつたのですか。どうなすつたのですか。」さっきの燈
台看守が「」やつと少しわかつたやうに青年にたづねました。青年はかすかにわらひまし
た。

「いえ、冰山にぶつつかつて船が沈みましてね、わたしたちはこちらのお父さんが急な用
で二ヶ月前一足さきに本国へお帰りになつたのであとから発つたのです。私は大学へはい
つてゐて、家庭教師にやとはれてゐたのです。ところがちやうど二十二日目、今日か昨日の
あたりです、船が冰山にぶつつかつて一ぺんに傾きもう沈みかけました。月のあかりはど
こかぼんやりありましたが、霧が非常に深かつたのです。ところがボートは左舷の方半分
はもうだめになつてゐましたから、とてもみんなは乗り切らないのです。もうそのうちに
も船は沈みますし、私は必死となつて、どうか小さな人たちを乗せて下さいと叫びました。
近くの人たちはすぐみちを開いてそして子供たちのために祈つて呉れました。けれどもそ

こからボートまでのところにはまだまだ小さな子どもたちや親たちやなんか居て、とても押しつける勇気がなかったのです。それでもわたくしはどうしてもこの方たちをお助けするのが私の義務だと思ひましたから前にある子供らを押しつけやうとしました。けれどもまたそんなにして助けてあげるよりはこ「の」まゝ神のお前にみんなで行く方がほんたうにこの方たちの幸福だと思ひました。それからまたその神にそむく罪はわたくし「し」ひとりですよつてぜひとも助けてあげやうと思ひました。けれどもどうして見てゐるとそれができないのです。子どもらばかりボートの中へはなしてやってお母さんが狂気のやうにキスを送りお父さんがかなしいのをじつところえてまっすぐに立つてゐるなどとてもう腸もちぎれるやうでした。そのうち船はもうずんずん沈みますから、私はもうすっかり覚悟してこの人たち二人を抱いて、浮べるだけは浮ばうとかたまつて船の沈むのを待つてゐました。誰が投げたかライフブイが一つ飛んで来ましたけれども滑つてずうつと向ふへ行つてしまひました。私は一生けん命で甲板の格子になつたところをはなして、三人それにしつかりとりつきました。どこからともなく「約二字分空白」番の声があがりました。たちまちみんなはいろいろな国語で一ぺんにそれをうたひました。そのとき俄かに大きな音がして私たちは水に落ち「」ました。もう渦に入ったと思ひながらしつかりこの人たちを

だいてそれからぼうつとしたと思つたらもうこゝへ来てゐたのです。この方たちのお母さんは一昨年没くなりました。えゝボートはきつと助かったにちがひありません 何せよほど熟練な水夫たちが漕いですばやく船からはなれてゐましたから。」

そこから小さな「嘆息」やいのりの声が聞えジョバンニもカムパネルラもいままで忘れてゐたいろいろのことをぼんやり思ひ出して眼が熱くなりました。

（あゝ、その大きな海はパシフィックといふのではなかつたらうか。その氷山の流れる北のはての海で、小さな船に乗つて、風や凍りつく潮水や、烈しい寒さとたたかつて、たれかゝ一生けんめいはたらいてゐる。ぼくはそのひとにほんたうに気の毒でそしてすまないやうな気がする。ぼくはそのひとのさひはひのためにいつたいどうしたらいいのだ「らう。」）ジョバンニは首を垂れて、すっかりふさぎ込んでしまひました。

「「」なにがしあはせかわからないです。ほんたうにどんなつらいことでもそれがたゞしいみちを進む中でのできごとなら峠の上りも下りもみんなほんたうの幸福に近づく一あしづつですから。」

燈台守がなぐさめてゐました。

「あゝさうです。たゞいちばんのさいはひに至るためにいろいろのかなしみもみんなおぼ

しめしです。「青年が祈るやうにさう答へました。

そしてあの姉弟はもうつかれてめいめいぐったり席によりかかつて睡つてゐました。さつきのあのはだしだった足にはいつか白い柔らかな靴をはいてゐたのです。

ごとごとごとと汽車はきらびやかな燐光の川の岸を進みました。向ふの方の窓を見ると、野原はまるで幻燈のやうでした。百も千もの大きささまの三角標、その大きなものの上には赤い点をうった測量旗も見え、野原のはてはそれらがいちめん、たくさんたくさん集つてぼおつと青白い霧のやう、そこからかまたはもつと向ふからかときどきさまさまの形のぼんやりした狼煙のやうなものが、かはるがはるきれいな桔梗いろのそらにうちあげられるのでした。じつにそのすきとほつた奇麗な風は、ばらの匂でいっぱいでした。

「いかゞですか。かういふ苹果はおはじめてでせう。「向ふの席の燈台看守がいつか黄金と紅でうつくしくいろいろどられた大きな苹果を落さないやうに両手で膝の上にかゝえてゐました。

「おや、どつから来たのですか。立派ですねえ。こゝらではこんな苹果ができるのですか。
。「青年はほんたうにびっくりしたらしく燈台看守の両手にかゝへられた一もりの苹果を眼を細くしたり首をまげたりしながらわれを忘れてながめてゐました。

「いや、まあおとり下さい。どうか、まあおとり下さい。」青年は一つとつてジヨバンニたちの方をちよつと見ました。「さあ、向ふの坊ちゃんがた。いかゞですか。おとり下さい。」ジヨバンニは坊ちゃんといはれたのですこししゃくにさわってだまってゐましたがカムパネルラは「ありがたう、」と云ひました。すると青年は自分でとつて一つづつ二人に送つてよこしましたのでジヨバンニも立つてありがたうと云ひました。

燈台看守はやつと両腕があいたのでこんどは自分で一つづつ睡つてゐる姉弟の膝にそつと置きました。

「どうもありがたう。どこでできるのですか。こんな立派な苹果は。」

青年はつくづく見ながら云ひました。

「この辺ではもちろん農業はいたしますけれども大ていひとりでいゝものができるやうな約束になつて居ります。農業だつてそんなに骨は折れはしません。たいてい自分の望む種子さへ播けばひとりでにどんどんできます。米だつてパシフヰツク辺のやうに殻もないし十倍も大きくて匂もいゝのです。けれどもあなたがたのいらつしやる方なら農業はもうありません。苹果だつてお菓子□だつてかすが少しもありませんからみんなそのひとそ

のひとによつてちがつたわづかのいゝかほりになつて毛あなからちらけてしまふのです。」

にはかに男の子がぼつちり眼をあいて云ひました。「あゝぼくいまお母さんの夢をみてみたよ。お母さんがね立派な戸棚や本のあるとこに居てね、ぼくの方を見て手をだしてにこにこにこにこわらつたよ。ぼくおつかさん。りんごをひろつてきてあげませうか云つたら眼がさめちやつた。あゝこゝさっきの汽車のなかだねえ。」

「その苹果がそこにあります。このおぢさんにいたゞいたのでですよ。」青年が云ひました。「ありがたうおぢさん。おや、かほるねえさんまだねてるねえ、ぼくおこしてやらう。ねえさん。ごらん、りんごをもらつたよ。おきてごらん。」姉はわらつて眼をさましまぶしさうに両手を眼にあてゝそれから苹果を見ました。男の子はまるでパイを喰べるやうにもうそれを喰べてゐました、また折角剥いたそのきれいな皮も、くるくるコルク抜ききりのやうな形になつて床へ落ちるまでの間にはすうつと 灰いろに光つて蒸発してしまふのでした。二人はりんごを大切にポケットにしまひました。

川下の向ふ岸に青く茂つた大きな林が見え、その枝には熟してまつ赤に光る円い実がいつぱい、その林のまん中に高い高い三角標が立って、森の中からはオーケストラベルやジロフォンにまちつて何とも云へずきれいな音いろが、とけるやうに浸みるやうに風につれて流れて来るのでした。

青年はぞくつとしてからだをふるふやうにしました。

だまってその譜を聞いてゐると、そこらにいちめん黄いろやうすい緑の明るい野原か敷物かゞひろがり、またまつ白な「蠟」のやうな露が太陽の面を擦めて行くやうに思はれました。

「まあ、あの鳥。」カムパネルラのとりのかほると呼ばれた女の子が叫びました。

「からすでない。みんなかささぎだ。」カムパネルラがまた何気なく叱るやうに叫びましたので、ジヨバンニはまた思はず笑ひ、女の子はきまり悪さうにしました。まったく河原の青じろいあかりの上に、黒い鳥がたくさんたくさんいっぱいに列になつてとまってぢつと川の微光を受けてゐるのでした。

「かささぎですねえ、頭のうしろのところに毛がぴんと延びてますから。」青年はとりなすやうに云ひました。

向ふの青い森の中の三角標はすっかり汽車の正面に來ました。そのとき汽車のずうつとうしろの方からあの聞きなれた「約二字分空白」番の讚美歌のふしが聞えてきました。よほどの人数で合唱してゐるらしいのでした。青年はさつと顔いろが青ざめ、たつて一ぺんそつちへ行きさうにしましたが思ひかへしてまた座りました。かほる子はハンケチを顔に

あててしまひました。ジヨバンニまで何だか鼻が変になりました。けれどもいつともなく誰ともなくその歌は歌ひ出されだんだんはつきり強くなりました。思はずジヨバンニもカムパネル「ラも一諸にうたひ出したのです。」

そして青い楸※の森が見えない天の川の向ふにさめぎめと光りながらだんだんうしろの方へ行つてしまひそこから流れて来るあやしい楽器の音ももう汽車のひゞきや風の音にすり耗らされて「ずうつとかすかになりました。「あ孔雀が居るよ。」

「えゝたくさん居たわ。」女の子がこたえました。

ジヨバンニはその小さく小さくなつていまはもう一つの緑いろの貝ぼたんのやうに見える森の上にさつさつと青じろく時々光つてその孔雀がはねをひろげたりとぢたりする光の反射「」を見ました。

「さうだ、孔雀の声だつてさつき聞えた。」カムパネルラがかほる子に云ひました。

「えゝ、三十疋ぐらゐはたしかに居たわ。ハープのやうに聞えたのはみんな孔雀よ。」

「」女の子が答へました。ジヨバンニは俄かに何とも云へずかなしい気がして思はず「カムパネルラ、こゝからはねおりて遊んで行かうよ。」とこわい顔をして云はうとしたくらゐでした。

（カムパネルラ、僕もう行つちまふぞ。僕なんか鯨だつて見たことないや。）ジョバンニはまるでたまらないほどいらしながらそれでも堅く唇を噛んでこらえて窓の外を見てゐました。その窓の外には海豚のかたちももう見えなくなつて川は二つにわかれてしまつた。そのまつくらな島のまん中に高い高いやぐらが一つ組まれてその上に一人の寛い服を着て赤い帽子をかぶつた男が立つてゐました。そして両手に赤と青の旗をもつてそらを見上げて信号してゐるのでした。ジョバンニが見てゐる間その人はしきりに赤い旗をふつてゐましたが俄かに赤旗をおろしてうしろにかくすやうにし青い旗を高く高くあげてまるでオーケストラの指揮者のやうに烈しく振りましました。すると空中にざあつと雨のやうな音がして何かまつくらなものがいくかたまりもいくかたまりも鉄砲丸のやうに川の向ふの方へ飛んで行くのでした。ジョバンニは思はず窓からからだを半分出してそつちを見あげました。美しい美しい桔梗いろのがらんとした空の下を実に何万といふ小さな鳥どもが幾組も幾組もめいめいせわしくせわしく鳴いて通つて行くのでした。「鳥が飛んで行くな。」ジョバンニが窓の外で云ひました。「どら、」カムパネルラもそらを見ました。そのときあのやぐらの上のゆるい服の男は俄かに赤い旗をあげて狂気のやうにふりうごかしました。するとびたつと鳥の群は通らなくなりそれと同時にびしやあんといふ潰れたやうな音が川下の

方で起つてそれからしばらくしいんとしました。と思つたらあの赤帽の信号手がまた青い旗をふつて叫んでゐたのです。「いまこそわたれわたり鳥、いまこそわたれわたり鳥。」その声もはつきり聞えました。それといつしよにまた幾万といふ鳥の群がそらをまつすぐにかけたのです。二人の顔を出してゐるまん中の窓からあの女の子が顔を出して美しい頬をかゞやかせながらそらを仰ぎました。「まあ、この鳥、たくさんですわねえ、あらまあそのきれいなこと。」女の子はジョバンニにはなしかけましたけれどもジョバンニは生意気ないやだいと思ひながらだまつて口をむすんでそらを見あげてゐました。女の子は小さくほつと息をしてだまつて席へ戻りました。カムパネルラが気の毒さうに窓から顔を引つ込めて地図を見てゐました。

「あの人鳥へ教へてるんでせうか。」女の子がそつとカムパネルラにたづねました。「わたり鳥へ信号してるんです。きつとどこからかのろしがあがるためでせう。」カムパネルラが少しおぼつかなさうに答へました。そして車の中はしいんとなりました。ジョバンニはもう頭を引つ込めたかつたのですけれども明るいとこへ顔を出すのがつらかつたのでだまつてこらえてそのまゝ立つて口笛を吹いてゐました。

(どうして僕はこんなにかなしのだらう。僕はもつとこゝろもちをきれいに大きくもた

なければいけない。あすこの岸のずうつと向ふにまるでけむりのやうな小さな青い火が見える。あれはほんたうにしづかでつめたい。僕はあれをよく見てこゝろもちをしづめるんだ。」ジヨバンニは熱つて痛いあたまを両手で押へるやうにしてそっちの方を見ました。

（あゝほんたうにどこまでもどこまでも僕といっしょに行くひとはないだらうか。カンパネルラだつてあんな女の子とおもしろさうに談してゐるし僕はほんたうにつらいなあ。」ジヨバンニの眼はまた泪でいっぱいになり天の川もまるで遠くへ行つたやうにぼんやり白く見えるだけでした。

そのとき汽車はだんだん川からはなれて崖の上を通るやうになりました。向ふ岸もまた黒い川の崖が川の岸を下流に下るにしたがつてだんだん高くなつて行くのでした。そしてちらつと大きなたうもろこしの木を見ました。その葉はぐるぐるに縮れ葉の下にはもう美しい緑いろの大きな苞が赤い毛を吐いて真珠のやうな実もちらつと見えたのでした。それは「だんだん数を増して来てもういまは列のやうに崖と線路との間にならび思はずジヨバンニが窓から顔を引つ込めて向ふ側の窓を見ましたときは美しいその野原の地平線のはてまでその大きなたうもろこしの木がほとんどいちめんに植えられてさやさや風にゆらぎその立派なちぢれた葉のさきからはまるでひるの間にいっぱい日光を吸つた金剛石のや

うに露がいつぱいについて赤や緑やきらきら燃えて光つてゐるのでした。カムパネルラが「あれたうもろこしだねえ」とジョバンニに云ひましたけれどもジョバンニはどうしても気持がなほりませんでしたからたゞぶつきり棒に野原を見たまゝ、「さうだらう。」と答へました。そのとき汽車はだんだんしづかになっていくつかのシグナルとてんてつ器の灯を過ぎ小さな停車場にとまりました。

その正面の青じろい時計はかつきり第二時を示しその振子は風もなくなり汽車もうごかずしづかなしづかな野原のなかにカチツカチツと正しく時を刻んで行くのでした。

そしてそのころなら汽車は□新世界交響樂のやうに鳴りました。車の中ではあの黒服の丈高い青年も誰もみんなやさしい夢を見てゐるのでした。（こんなしづかないゝとこで僕はどうしてもつと愉快になれないだらう。どうしてこんなにひとりさびしいのだらう。けれどもカムパネルラなんかあんまりひどい、僕といつしよに汽車に乗つてゐながらまるであんな女の子とばかり談してゐるんだもの。僕はほんたうにつらい。）ジョバンニはまた両手で顔を半分かくすやうにして向ふの窓のそとを見つめてゐました。すきとほった硝子のやうな笛が鳴つて汽車はしづかに動き出しカムパネルラもさびしさうに星めぐりの口笛を吹きました。

「えゝ、えゝ、もうこの辺はひどい高原ですから。」うしろの方で誰かとしよりらしい人のいま眼がさめたといふ風ではきはき談してゐる声がしました。「たうもろこしだって棒で二尺も孔をあけておいてそこへ播かないと生えないんです。」

「さうですか。川まではよほどありませうかねえ、」「えゝえゝ河までは二千尺から六千尺あります。もうまるでひどい峡谷になつてゐるんです。」さうさうこゝはコロラドの高原ぢやなかつたらうか、ジョバンニは思はずさう思ひました。向ふではあの一ばんの姉が小さな妹を自分の胸によりかゝらせて睡らせながら黒い瞳をうつとりと遠くへ投げて何をみるでもなしに考へ込んでゐるのでしたしカムパネルラはまださびしさうにひとり口笛を吹き二番目の女の子はまるで絹で包んだ苹果のやうな顔いろをしてジョバンニの見る方を見てゐるのでした。突然たうもろこしがなくなつて巨きな黒い野原がいつぱいにひらけました。新世界交響楽はいよいよはつきり地平線のはてから湧きそのまつ黒な野原のなかを一人のインデアンが白い鳥の羽根を頭につけたくさんの石を腕と胸にかざり小さな弓に矢を番へて一目散に汽車を追つて来るのでした。「あら、インデアンですよ。インデアんですよ。おねえさまごらんさない。」黒服の青年も眼をさしました。ジョバンニもカムパネルラも立ちあがりました。「走つて来るわ、あら、走つて来るわ。追ひかけてゐるんで

せう。「いゝえ、汽車を追ってるんじゃないんですよ。獵をするか踊るかしてるんですよ。」青年はいまどこに居るか忘れたといふ風にポケットに手を入れて立ちながら云ひました。

まったくインデアンは半分は踊つてゐるやうでした。第一かけるにしても足のふみやうがもつと経済もとれ本気にもなれさうでした。にはかにくつきり白いその羽根は前の方へ倒れるやうになりインデアンはぴたと立ちどまつてすばやく弓を空にひきました。そこから一羽の鶴がふらふらと落ちて来てまた走り出したインディアンの大きくひろげた両手に落ちこみました。インデアンはうれしさうに立つてわらひました。そしてその鶴をもつてこつちを見てゐる影ももうどんどん小さく遠くなり電しんばしらの碇子がきらつきらつと続いて二つばかり光つてまたたうもろこしの林になってしまひました。こつち側の窓を見ますと汽車はほんたうに高い高い崖の上を走つてゐてその谷の底には川がやっぱり幅ひろく明るく流れてゐたのです。

「えゝ、もうこの辺から下りです。何せこんどは一ぺんにあの水面までおりて行くんですから容易ぢやありません。この傾斜があるもんですから汽車は決して向ふからこつちへは来な「い」んです。そろもうだんだん早くなつたでせう。」さっきの老人らしい声が云ひ

ました。

どんどんどんどん汽車は降りて行きました。崖のはじめに鉄道がかゝるときは川が明るく下にのぞけたのです。ジヨバンニはだんだんこゝろもちが明るくなつて来ました。汽車が小さな小屋の前を通つてその前にしよんぼりひとりの子供が立つてこつちを見てゐるときなごは思はずほうと叫びました。

どんどんどんどん汽車は走つて行きました。室中のひとたちは半分うしろの方へ倒れるやうになりながら腰掛にすっかりしがみついてゐました。ジヨバンニは思はずカムパネルラとわらひました。もうそして天の川は汽車のすぐ横手をいままでよほど激しく流れて来たらしくときどきちら「ち」ら光つてながれてゐるのでした。うすあかい河原なでしこの花があちこち咲いてゐました。汽車はやうやく落ち着いたやうにゆつくりと走つてゐました。向ふとこつちの岸に星のかたちとつるはしを書いた旌がたつてゐました。

「あれ何の旗だらうね。」ジヨバンニがやつとものを云ひました。「さあ、わからないねえ、地図にもないんだもの。鉄の舟が書いてあるねえ。」「あゝ。」「橋を架けるとこぢやないんでせうか。」女の子が云ひました。「あゝあれ工兵の旗だねえ。架橋演習をしてるんだ。けれど兵隊のかたちが見えないねえ。」

その時向ふ岸ちかくの少し下流の方で見えない天の川の水がぎらっと光って柱のやうに高くはねあがりどおと烈しい音がしました。「発破だよ、発破だよ。」カムパネルラはこおどりました。

その柱のやうになった水は見えなくなり大きな鮭や鱒がきらつきらっと白く腹を光らせて空中に抛り出されて円い輪を描いてまた水に落ちました。ジヨバンニはもうはねあがりたいくらゐる氣持が軽くなつて云ひました。「空の工兵大隊だ。どうだ、鱒やなんかゞまるでこんなになつてはねあげられたねえ。僕こんな愉快な旅はしたことない。いゝねえ。」

「あの鱒なら近くで見たらこれくらゐあるねえ、たくさんさかな居るんだな、この水の中に。」

「小さなお魚もゐるんでせうか。」女の子が談につり込まれて云ひました。「居るんでせう。大きなのが居るんだから小さいのもゐるんでせう。けれど遠くだからいま小さいの見えなかつたねえ。」ジヨバンニはもうすっかり機嫌が直つて面白さうにわらつて女の子に答へました。

「あれきつと双子のお星さまのお宮だよ。」男の子がいきなり窓「の」外をさして叫びました。

右手の低い丘の上に小さな水晶でもこさえたやうな二つのお宮がならんで立ってゐました。

「双子のお星さまのお宮って何だい。」

「あたし前になんべんもお母さんから「聴」いたわ。ちゃんと小さな水晶のお宮で二つならんでゐるからきつとさうだわ。」

「はなしてごらん。双子のお星さまが何したつての。」

「ぼくも知つてらい。双〔子〕のお星さまが野原へ遊びにでてからすと喧嘩したんだらう。」

「さうじゃないわよ。あのね、天の川の岸にね、おつかさんお話なすつたわ、……」

「それから彗星ほうきがギーギーギーギーて云つて来たねえ。」

「いやだわ。あたちゃんさうじゃないわよ。それはべつの方だわ。」

「するとあすこにいま笛を吹いて居るんだらうか。」

「いま海へ行つてらあ。」

「いけないわよ。もう海からあがつてゐらつしやつたのよ。」

「さうさう。ぼく知つてらあ、ぼくおはなししやう。」

川の向ふ岸が俄かに赤くなりました。楊の木や何かもまっ黒にすかし出され見えない。天の川の波もときどきちらちら針のやうに赤く光りました。まったく向ふ岸の野原に大きな

まつ赤な火が燃されその黒いけむりは高く桔梗いろのつめたさうな天をも焦がしさうでした。ルビーよりも赤くすきとほりリチウムよりもうつくしく酔ったやうになってその火は燃えてゐるのでした。「あれは何の火だらう。あんな赤く光る火は何を燃やせばできるんだらう。」ジョバンニが云ひました。「蝸の火だな。」カムパネルラが又地図と首つ引きして答へました。「あら、蝸の火のことならあたし知ってるわ。」

「蝸の火って何だい。」ジョバンニがききました。「蝸がやけて死んだのよ。その火がいまでも燃えてるってあたし何べんもお父さんから聞いたわ。」「蝸って、虫だらう。」

「えゝ、蝸は虫よ。だけどいゝ虫だわ。」「蝸いゝ虫ぢやないよ。僕博物館でアルコールにつけてあるの見た。尾にこんなかぎがあつてそれで螫されると死ぬって先生が云つたよ。」「さうよ。だけどいゝ虫だわ、お父さん斯う云つたのよ。むかしのバルドラの野原に一びきの蝸がゐて小さな虫やなんか殺してたべて生きてゐたんですって。するとある日いたちに見附かつて食べられさうになつたんですって。きそりは一生けん命遁げて遁げたけどたうたういたちに押へられさうになつたわ、そのときいきなり前に井戸があつてその中に落ちてしまつたわ、もうどうしてもあがられないできそりは溺れはじめたのよ。そのとききそりは斯う云つてお祈りしたといふの、

あゝ、わたしはいままでいくつのものの命をとったかわからない、そしてその私がこんどいたちにとられやうとしたときはあんなに一生けん命にげた。それでもたうたうこんなになつてしまつた。あゝなんにもあてにならない。どうしてわたしはわたしのからだをだまつていたちに呉れてやらなかつたらう。そしてらいたちも一日生きのびたらうに。どうか神さま。私の心をごらん下さい。こんなにむなしく命をすてずどうかこの次にはまことみんなの幸のために私のからだをおつかひ下さい。つて云つたといふの。そしてらいつか蝸はじぶんのからだがまつ赤なうつくしい火になつて燃えてよるのやみを照らしてゐるのを見たつて。いまでも燃えてるつてお父さん仰つたわ。ほんたうにあの火それだわ。」

「さうだ。見たまへ。そこらの三角標はちやうどさそりの形にならんでゐるよ。」

ジヨバンニはまつたくその大きな火の向ふに三つの三角標がちやうどさそりの腕のやうにこつちに五つの三角標がさそりの尾やかぎのやうにならんでゐるのを見ました。そしてほ「ん」たうにそのまつ赤なうつくしいさそりの火は音なくあかるくあかるく燃えたのです。その火がだんだんうしろの方になるにつれてみんなは何とも云へずにぎやかなさまざまの樂の音や草花の匂のやうなもの口笛や人々のざわざわ云ふ声やらを聞きました。それはもうちきちかくに町か何かあつてそこにお祭でもあるといふやうな気がするのです。

「ケンタウル露をふらせ。」いきなりいままで睡つてゐたジヨバンニのとなりの男の子が向ふの窓を見ながら叫んでゐました。

あゝそこにはクリスマスストリーのやうにまつ青な唐櫓かもみの木がたつてその中にはたくさんのおたくさんの豆電燈がまるで千の螢でも集つたやうについてゐました。

「あゝ、さうだ、今夜ケンタウル祭だねえ。」「あゝ、こゝはケンタウルの村だよ。」カムパネルラがすぐ云ひました。「以下原稿一枚？なし」

「ボール投げなら僕決してはづさない。」

男の子が大威張りで云ひました。

「もうぢきサウザンクロスです。おける支度をして下さい。」青年がみんなに云ひました。「僕も少し汽車へ乗つてるんだよ。」男の子が云ひました。カムパネルラのとなりの女の子はそれはそは立つて支度をはじめましたけれどもやつぱりジヨバンニたちとわかれたいくないやうなやうでした。

「こゝでおりにけあいけないのです。」青年はきちつと口を結んで男の子を見おろしながら

ら云ひました。「厭だい。僕もう少し汽車へ乗ってから行くんだい。」ジヨバンニがこらえ兼ねて云ひました。「僕たちと一諸に乗って行かう。僕たちどこまでだって行ける切符持つてるんだ。」「だけどあたしたちもうこゝで降りなけあいけないのよ。こゝ天上へ行くとこなんだから。」女の子がさびしさうに云ひました。

「天上へなんか行かなくなつていゝぢやないか。ぼくたちこゝで天上よりもつといゝとこをこさえなけあいけないつて僕の先生が云つたよ。」「だつておつ母さんも行つてらつしやるしそれに神さまが仰つしやるんだわ。」「そんな神さまうその神さまだい。」「あなたの神さまうその神さまよ。」「さうぢやないよ。」「あなたの神さまつてどんな神さま」ですか。「青年は笑ひながら云ひました。「ぼくほんたうはよく知りません、けれどもそんなでなしにほんたうのたつた一人の神さまです。」「ほんたうの神さまはもちろんたつた一人です。」「あゝ、そんなでなしにたつたひとりのほんたうのほんたうの神さまです。」「だからさうぢやありませんか。わたくしはあなた方がいまにそのほんたうの神さまの前にわたくしたちとお会ひになることを祈ります。」青年はつゝましく両手を組みました。女の子もちやうどその通りにしました。みんなほんたうに別れが惜しさうでその顔いろも少し青ざめて見えました。ジヨバンニはあぶなく声をあげて泣き出さうと

しました。

「さあもう仕度はいゝんですか。ぢきサウザンクロスですから。」

あゝそのときでした。見えない天の川のずうつと川下に青や橙やもうあらゆる光でちりばめられ、[□]た十字架がまるで一本の木といふ風に川の中から立ってかゞやきその上には青じろい雲がまるい環になつて后光のやうにかかつてゐるのでした。汽車の中がまるでざわざわしました。みんなあの北の十字のときのやうにまつすぐに立ってお祈りをはじめました。あつちにもこつちにも子供が瓜に飛びついたときのやうなよろこびの声や何とも云ひやうない深いつゝましいためいきの音ばかりきこえました。そしてだんだん十字架は窓の正面になりあの苹果の肉のやうな青じろい環の雲もゆるやかにゆるやかに繞つてゐるのが見えました。

「ハルレヤハルレヤ。」明るくたのしくみんなの声はひゞきみんなはそのそらの遠くからつめたいそらの遠くからすきとほつた何とも云へずさわやかなラツパの声をききました。そしてたくさんのシグナル「や」電燈の灯のなかを汽車はだんだんゆるやかになりたうたう十字架のちやうどま向ひに行つてすつかりとまりました。「さあ、下りるんですよ。」青年は男の子の手をひき姉妹たちは互にえりや肩を直してやつてだんだん向ふの出口の方

へ歩き出しました。「ぢやさよなら。」女の子がふりかへって二人に云ひました。「さよなら。」ジヨバンニはまるで泣き出したのをこらへて怒ったやうにぶつきり棒に云ひました。女の子はいかにもつらさうに眼を大きくしても一度こつちをふりかへってそれからあとはもうだまって出て行ってしまひました。汽車の中はもう半分以上も空いてしまひ俄かにがらんとしてさびしくなり風がいつぱいに吹き込みました。

そして見てゐるとみんなはつゝましく列を組んであの十字架の前の天の川のなぎさにひざまづいてゐました。そしてその見えない天の川の水をわたってひとりの神々しい白いきもの人が手をのばしてこつちへ来るのを二人は見ました。けれどもそのときはもう硝子の呼子は鳴らされ汽車はうごき出しと思ふうちに銀いろの霧が川下の方からすうつと流れて来てもうそつちは何も見えなくなりました。たゞたくさんのくるみの木が葉をさんさんと光らしてその霧の中に立ち黄金の円光をもった電気栗鼠が可愛い顔をその中からちらちらのぞいてゐるだけでした。

そのときすうつと霧がはれかゝりました。どこかへ行く街道らしく小さな電燈の一行にいた通りがありました。それはしばらく線路に沿って進んでゐました。そして二人がその

あかしの前を通つて行くときはその小さな豆いろの火はちやうど挨拶でもするやうにぼか
つと消え二人が過ぎて行くときまた点くのでした。

ふりかへつて見るとさっきの十字架はすっかり小さくなつてしまひほんたうにもうそのまゝ
胸にも吊されさうになり さっきの女の子や青年たちがその前の白い渚にまだひざまづい
てゐるのかそれともどこか方角もわからないその天上へ行つたのかぼんやりして見分けら
れませんでした。

ジヨバンニは あゝ と深く息しました。「カムパネルラ、また僕たち二人きりになつた
ねえ、どこまでもどこまでも一諸に行かう。僕はもうあのさそりのやうにほんたうにみん
なの幸のためならば僕の中からだなんか百べん灼いてもかまはない。」「うん。僕だつてさ
うだ。」「カムパネルラの眼にはきれいな涙がうかんでゐました。「けれどもほんたうのさ
いはひは一体何だらう。」「ジヨバンニが云ひました。「僕わからない。」「カムパネルラが
ぼんやり云ひました。

「僕たちしつかりやらうねえ。」「ジヨバンニが胸いっぱい新らしい力が湧くやうにふうと
息をしながら云ひました。

「あ、あすこ石炭袋だよ。その孔だよ。」「カムパネルラが少しそつちを避けるやうにし

ながら天の川のひとこを指さしました。ジヨバンニはそつちを見てまるでぎくつとしてしまひました。天の川のひとこに大きなまつくらな孔がどほんとあいてゐるのです。その底がどれほど深いかその奥に何があるかいくら眼をこすつてのぞいてもなんにも見えずつたゞ眼がしんと痛むのでした。ジヨバンニが云ひました。「僕もうあんな大きな暗の中だつてこわくない。きつとみんなのほんたうのさいはいをさがしに行く。どこまでもどこまでも僕たち一諸に進んで行かう。」「あゝきつと行くよ。あゝ、あすこの野原はなんてきれいだらう。みんな集つてるねえ。あすこがほんたうの天上なんだ。あつあすこにゐるのぼくのお母さんだよ。」カムパネルラは俄かに窓の遠くに見えるきれいな野原を指して叫びました。

ジヨバンニもそつちを見ましたけれどもそこはぼんやり白くけむつてゐるばかりどうしてカムパネルラが云つたやうに思はれませんでした。何とも云へずさびしい気がしてぼんやりそつちを見てゐましたら向ふの河岸に二本の電信ばしらが丁度両方から腕を組んだやうに赤い腕木をつらねて立つてゐました。「カムパネルラ、僕たち一諸に行かうねえ。」ジヨバンニが斯う云ひながらふりかへつて見ましたらそのいままでカムパネルラの座つてゐた席にもうカムパネルラの形は見えず□ジヨバンニはまるで鉄砲丸のやうに立ちあが

りました。そして誰にも聞えないやうに窓の外へからだを乗り出して力いっぱいはげしく胸をうって叫びそれからもう咽喉いっばい泣きだしました。もうそこらが一ぺんにまっくらになったやうに思ひました。□

ジヨバンニは眼をひらきました。もとの丘の草の中につかれてねむってゐたのでした。胸は何だかおかしく熱り頬にはつめたい涙がながれてゐました。

ジヨバンニはばねのやうにはね起きました。町はすっかりさっきの「通」りに下でたくさんさんの灯を綴つてはゐましたがその光はなんだかさつきよりは熟したといふ風でした。そしてたつたいま夢であるいた天の川もやっぱりさっきの通りに白くぼんやりかゝりまっ黒な南の地平線の上では殊にけむつたやうになってその右には蠍座の赤い星がうつくしくきらめき、そらぜんたいの位置はそんなに変わつてもゐないやうでした。

ジヨバンニは一さんに丘を走つて下りました。まだ夕ごはんをたべないで待つてゐるお母さんのことが胸いっばいに思ひだされたのです。どんどん黒い松の林の中を通つてそれからほの白い牧場の「柵」をまはつてさっきの入口から暗い牛舎の前へまた来ました。そこには誰かゞいま帰つたらしくさつきなかつた一つの車が何かの樽を二つ乗つけて置いてあ

りました。

「今晚は、」ジヨバンニは叫びました。

「はい。」白い太いずぼんをはいた人がすぐ出て来て立ちました。

「何のご用ですか。」

「今日牛乳がぼくのところへ来なかったのですが」

「あ済みませんでした。」その人はすぐ奥へ行って一本の牛乳瓶をもって来てジヨバンニに渡しながらかまた云ひました。

「ほんたうに、済みませんでした。今日は「ひ」るすぎうっかりしてこうしの柵をあけて置いたもんですから大将早速親牛のところへ行って半分ばかり吞んでしまひましてね……」その人はわらひました。

「さうですか。ではいたゞいて行きます。」「えゝ、どうも済みませんでした。」「いゝえ。」ジヨバンニはまだ熱い乳の瓶を両方のでのひらで「包むやうにもって牧場の柵を出ました。

そしてしばらく木のある町を通って大通りへ出てまたしばらく行きますとみちは十文字になつてその右手の方通りのはづれにさつきカムパネルラたちのあかりを流しに行った川へ

かゝつた大きな橋のやぐらが夜のそらにぼんやり立ってゐました。

ところがその十字になつた町かどや店の前に女たちが□七八人ぐらゐづつ集つて橋の方を見ながら何かひそひそ談してゐるのです。それから橋の上にもいろいろなあかりがいつぱいなのでした。

ジヨバンニはなぜかさあつと胸が冷たくなつたやうに思ひました。そしていきなり近くの人たちへ

「何かあつたんですか。」と叫ぶやうにきゝました。

「こどもが水へ落ちたんですよ。」一人が云ひますとその人たちは一斉にジヨバンニの方を見ました。ジヨバンニはまるで夢中で橋の方へ走りました。橋の上は人でいっぱい河が見えませんでした。白い服を着た巡査も出てゐました。

ジヨバンニは橋の袂から飛ぶやうに下の広い河原へおりました。

その河原の水際に沿つてたくさんのあかりがせわしくのぼつたり下つたりしてゐました。向ふ岸の暗いどてにも火が七つ八つうごいてゐました。そのまん中をもう烏瓜のあかりもない川が、わづかに音をたてゝ灰いろにしづかに流れてゐたのでした。

河原のいちばん下流の方へ洲のやうになつて出たところに人の集りがくつきりまつ黒に立

つてゐました。ジョバンニはどんどんそっちへ走りました。するとジョバンニはいきなりさつきカムパネルラといっしょだつたマルソ「に」会ひました。マルソがジョバンニに走り寄つてきました。「ジョバンニ、カムパネルラが川へはいつたよ。」「どうして、いつ。」「ザネリがね、舟の上から烏うりのあかりを水の流れる方へ押してやらうとしたんだ。そのとき舟がゆれたもんだから水へ落つこつたらう。すると「カムパネルラ」がすぐ飛びこんだんだ。そしてザネリを舟の方へ押してよこした。ザネリはカトウにつかまつた。けれどもあとカムパネルラが見えないんだ。」「みんな探してるんだらう。」「あゝすぐみんな来た。カムパネルラのお父さんも来た。けれども見附からないんだ。ザネリはうちへ連れられてつた。」ジョバンニはみんなの居るそっちの方へ行きました。そこに学生たち町の人たちに囲まれて青じろい尖つたあごをしたカムパネルラのお父さんが黒い服を着てまっすぐに立つて右手に持った時計をじつと見「つ」めてゐたのです。

みんなもぢつと河を見てゐました。誰も一言も物を云ふ人もありませんでした。ジョバンニはわくわくわくわく足がふるえました。魚「を」とるときのアセチレンランプがたくさんせはしく行つたり来たりして黒い川の水はちらちら小さな波をたてゝ流れてゐるのが見えるのでした。

下流の方の川は、一ぱい銀河が巨きく写ってまるで水のないそのまゝのそらのやうに見えました。

ジヨバンニはそのカムパネルラはもうあの銀河のはづれにしかゐないといふやうな気がしてしかたなかったのです。

けれどもみんなはまだ、どこかの波の間から、

「ぼくずるぶん泳いだぞ。」と云ひながらカムパネルラが出て来るか或ひはカムパネルラがどこかの人の知らない洲にでも着いて立つてゐて誰かの来るのを待つてゐるかといふやうな気がして仕方ないらしいのでした。けれども俄かにカムパネルラのお父さんがきつぱり云ひました。

「もう駄目です。落ちてから四十五分たちましたから。」

ジヨバンニは思はずか「け」よつて博士の前に立つて、ぼくはカムパネルラの行った方を知つてゐますぼくはカムパネルラといつしよに歩いてゐたのですと云はうとしましたがもうのどがつまつて何とも云へませんでした。すると博士はジヨバンニが挨拶に来たとも思つたものですか。しばらくしげしげジヨバンニを見てゐましたが

「あなたはジヨバンニさんでしたね。どうも今晚はありがたう。」と町ねいに云ひました。

ジヨバンニは何も云へずにたゞおじぎをしました。

「あなたのお父さんはもう帰つてゐますか。」博士は堅く時計を握つたまゝまたきゝました。

「いゝえ。」ジヨバンニはかすかに頭をふりました。

「どうしたのかなあ、ぼくには一昨日大へん元気な便りがあつたんだが。今日あ□たりもう着くころなんだが。船が遅れたんだな。ジヨバンニさん。あした放課后みなさんとうちへ遊びに来てくださいね。」

さう云ひながら博士は□また川下の銀河のいっばいにうつつた方へじつと眼を送りました。ジヨバンニはもういろいろなこと胸がいつぱいでなんにも云へずに博士の前をはなれて早くお母さんに牛乳を持って行つてお父さんの帰ることを知らせやうと思ふともう一目散に河原を街の方へ走りました。

青空文庫情報

底本：「【新】校本宮澤賢治全集 第十一巻 童話※【#ローマ数字4、1-13-24】 本文篇」筑摩書房

1996（平成8）年1月25日初版第1刷発行

※底本のテキストは、著者草稿によります。

※底本では校訂及び編者による説明を「〔 〕」、削除を「□」で表示しています。

※「カムパネルラ」と「カンパネルラ」の混在は、底本通りです。

※底本は新字旧仮名づかいです。なお拗音、促音の小書きは、底本通りです。

入力：砂場清隆

校正：北川松生

2016年6月10日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

銀河鉄道の夜

宮沢賢治

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>